

平成二十七年
度

中世文学会秋季大会

研究発表要旨

『慕帰絵』の制作意図―善如の位置付けをめぐる―

東京大学大学院生 石井 悠加

『慕帰絵』（全十巻・西本願寺蔵）は、観応二（一二五二）年正月の本願寺三世覚如示寂の後、次子従覚らの手でわずか九ヶ月後に完成された伝記絵巻である。

本発表は、もう一つの覚如の伝記絵巻『最須敬重絵詞』や、覚如が制作した曾祖父親鸞の伝記絵巻などとも比較しつつ、和歌と絵画双方の検討によって、『慕帰絵』の制作意図を明らかにすることを目的とする。

『慕帰絵』は①出生・幼年期（巻一～二）②少壮期（巻三～五(2)）③老年期・入滅（巻五(3)～十）に大別され、最も分量のある③は、詩歌会や、親戚故旧との和歌の贈答、和歌の名所探訪など、歌人としての側面を描くことに画・詞ともに力を入れている。このことは、歌道を重視した宗家日野家に対する覚如の強い帰属意識を示しているものと従来指摘されている。

ではなぜ『慕帰絵』は絵巻として制作されたのか。画・詞に頻出する幼い童子・光養丸の存在に新たに注目したい。覚如と童子の間に教義の口授のような師弟関係を示す場面はないが、歌の贈答を通じて交流し、寺院の隆盛を約束し合い、そして臨終の枕頭で悲嘆の表情にくれる童子の姿は、彼が覚如鍾愛の存在であることを鑑賞者に示している。この光養丸とは、幼時より次期留守職に指名され、覚如の入滅の後十九歳で本願寺四世となった、従覚の次子・善如の幼名である。

伝記絵巻という形態は、描かれる人物の生涯を周りの景色・人物ごと絵画化することで、文字作品を超える情報を鑑賞者に示し得る。覚如の没後直ちに『慕帰絵』を制作した従覚らの目的には、故人追慕の念を記すことに加えて、善如が故人の地位を継承することの正統性を明らかにすることがあったのではないか。そしてそれに最も適した作品形態こそ、絵巻であったのではないか。この点を内容の具体的検討によって明らかにする。

良基連歌論の受容―『紹巴教書』まで―

青山学院大学大学院生 寺尾 麻里

康永四年(一三四五)成立の『僻連抄』以降二条良基によって著された連歌論は、連歌論の基盤をつくり、後代に多大なる影響を与えた。しかし、連歌論書の受容という点に関しては、これまでほとんど明らかにされていらない。そもそも、良基の連歌論書は現在、『筑波問答』を除いて孤本に近いものばかりで、それが室町期においてどのように伝わったかは不明であった。

そのような中で一六〇〇年近くに成立した『紹巴教書』は、宗祇に仮託された『連歌諸体秘伝抄』を受けて書かれており、この『連歌諸体秘伝抄』は良基連歌論と関係の深いことが先行研究によって指摘されてきた。論者はこのほど、『連歌諸体秘伝抄』と良基連歌論とを結ぶ『連歌八十体之書』の存在を「『連歌八十体之書』考―一条良基と宗祇仮託書を繋ぐもの―」(『連歌俳諧研究』一二八号)において示した。これにより、良基連歌論が宗祇仮託の一書へ至る過程の一端が明らかになり、良基連歌論から宗祇仮託書へ、そして『紹巴教書』へといった一連の流れが見えてきた。

一方、他の宗祇仮託書である『連歌秘伝抄』にも良基連歌論の影響が現れているが、『連歌八十体之書』『連歌諸体秘伝抄』の系統と比較すると、異なる性格が見られる。『連歌秘伝抄』は良基連歌論の原形から距離があるということがうかがわれるのである。この事実は、『連歌八十体之書』『連歌諸体秘伝抄』に良基連歌論の影響がよく残ることと対照的であり、このことは、同じく宗祇に仮託された書であっても、異なる人物の手によって書かれた可能性を示すものといえる。

以上のような良基連歌論の受容のあり方を、『紹巴教書』まで付合に関わる説を軸として検証し、南北朝室町期の連歌論書の系統の一端を明らかにしたい。

夢想連歌―慶長期を中心に―

帝塚山学院大学名誉教授 鶴崎 裕雄

古代から夢は言葉とともにあつて、神の啓示や我々の祈念や願望を表す。外国にはヤコブの梯子や莊子の胡蝶などの夢がある。和歌や連歌にも夢想の歌や句が残されていて、『新古今和歌集』の住吉明神の歌などよく知られている。今年（平成二十七年）は大坂の陣後、四百年にあたり、慶長年間を中心に調べるが多かった。この時期、夢想連歌が多く残されている。慶長期を中心に夢想連歌について、以下の要領で考えてみたい。

- 一、夢、夢想ということ
- 二、戦国期の終焉、慶長年間と元和偃武
- 三、朝鮮出兵（慶長の役）前の秀吉の夢想連歌
- 四、家康の幼名、天野康景の下女の夢想、柳営連歌
- 五、慶長四年二月、家康の一族・家臣団の夢想連歌
- 六、最上義光ほか、諸氏の夢想連歌
- 七、慶長一〇年『白山万句』に先立つ宗甫・明宗の夢想連歌
- 八、夢想連歌の課題・研究点、学際的研究

久留米文化財収蔵館寄託『平治物語絵巻』『六波羅合戦巻』について

伊藤 悦子

『平治物語絵巻』『六波羅合戦巻』は、絵と詞書の断簡十五点が現存するのみであり、その全容は東京国立博物館所蔵の白描模本（以下、東博本と記す）など数本の模本でしか知ることができない。原本が断簡でしか伝わらない現在、模本の研究は必要であると思われるが、これまで代表模本である東博本が原本の補助資料的役割で取り上げられるものの、模本全体を対象とした研究はほとんどなかった。ところが、二〇一四年に早稲田大学図書館が彩色模本（以下、早大本と記す）を収蔵し、滝澤みか氏が早大本の紹介・考察にとどまらず、現存模本の調査をされて、系統分類についても触れておられる（「早稲田大学図書館所蔵『平治物語絵巻 六波羅合戦巻』について」（『早稲田大学図書館紀要』62号、二〇一五年三月）。それによると、早大本は他の現存模本とは異なる点が多いという。奥書についても、宮内庁書陵部本などの模本が、森井善太郎・千賀義徴の名を記しているのに対し、早大本は千賀義徴の名が記されていないという特徴があるとされる。

稿者は二〇一四年四月に、久留米文化財収蔵館で資料調査を行った際、「六波羅合戦巻」の略式模本（以下、久留米本と記す）を発見したのだが、早大本と比較すると、奥書を含めて早大本が独自とする特徴の多くが久留米本にも共通しており、両者が緊密な関係であることが分かった。しかし、僅かながら異なる点も見受けられる。また、久留米本にも独自と思われる描写や奥書の記述がある。

本発表では、久留米本の紹介に加え、早大本や断簡との異同、および久留米本の特徴や系統などを明らかにしたい。

抄物と謡曲―惟高妙安述『玉塵抄』・『詩学大成抄』について―

山東大学威海校区翻訳学院 佐々木 雷太

いわゆる「抄物」（本報告では、室町期の五山僧による外典の講義内容を筆録した書籍に限定する）は、従来、国語学において室町期の口語資料として活用されることが多く、記載内容についての研究がなされる機会は乏しかったように思われる。本報告では、このような現況を鑑み、『玉塵抄』・『詩学大成抄』に代表される、惟高妙安（一四八〇～一五六七）の講義内容を筆録した抄物を対象として、幸若舞曲・謡曲・平曲に代表される芸能関連の記載に注目し、当該時期の五山僧の芸能に対する意識につき考察を試みる。

具体的には、惟高妙安による抄物には、幸若舞曲「百合若大臣」・「烏帽子折」、謡曲「盛久」・「熊野」などについて、先行研究に漏れた言及も認められ、これらの概要につき報告する。また、惟高妙安は、南北朝期の臨濟僧、中巖円月が称揚したとされる「呉太伯後裔説（原克昭氏）」に基づき、平曲を語る座頭を『周礼』の遺制と解する見解に立つこと。更に『玉塵抄』・『詩学大成抄』に言及される『平家物語』関連の記載は、謡曲の修羅物と重なる傾向が高いこと。また惟高妙安は、唐土の故事に依拠した「唐物」の謡曲には言及しないことなども踏まえ、中世後期の五山僧の謡曲および『平家物語』に対する意識について卑見を述べたい。

『極楽願往生歌』と院政期の六波羅

奈良女子大学 岡崎 真紀子

『極楽願往生歌』は、康治元年（一一四二）に西念という人物がしるした片仮名書き自筆の和歌で、歌頭と歌末にいろは四十七字を置く沓冠歌に一首を加えた四十八首と序からなる。明治三十九年（一九〇六）に現京都市東山区小松町で、紺紙金泥供養目録と白紙墨書供養目録、青銅磬の破片とともに出土した。作者西念は、写経・造仏・布施等の多くの供養を積んだ末に出家し、天王寺の西門からの入水を試みた後に、改めて往生の地と定めた場所に、供養目録と当該和歌を埋納したのである。これは、院政期に盛行した埋経（經典等を書写して土中に埋める営為）の一例と言えるが、埋納物に和歌が伴う類例は、他に見出しがたい。そこで本発表では、原本の調査を踏まえ、供養目録と和歌表現を検討して、『極楽願往生歌』が生み出された背景の一端を考える。

供養目録および序の記述と、一首一行書きで沓冠字の並びを料紙上に表す書記形式から、『極楽願往生歌』の根底には、經典の一字一字を仏とみなす思想と源を同じくする意識があることがわかる。そして詠作のなかには、閻魔に思いを訴える語句や、地藏菩薩が往生への道を説いたと伝える歌（今昔物語集）に通ずる語句が見出され、『地藏十王経』に繋がる発想も読みとれる。『極楽願往生歌』の出土場所すなわち西念が埋納した所は、六波羅蜜寺の寺域内であった。そこは地藏信仰の根ざした極楽往生を願う地として知られ、当時は平正盛が建てた阿弥陀堂をはじめとする私堂が集まっていた。法会に際して詠まれた和歌も存する。『極楽願往生歌』の表現は、六波羅という場のもつ宗教的意味合いと深く結びついているのである。やがてこの一帯は、平家一門の拠点となり、その後中世に至るまで武家の政事を司る場として政治的意味合いを加えてゆくが、そのころの六波羅で詠まれた和歌は、あまり多く伝存しない。『極楽願往生歌』は、詠作された同時代のありようを映し出していると言えるのかもしれない。